鹿山集　十

特別
へ5
1534
8

蒼山集秋之第三目録

月

八月十五夜

九月十三夜

門刹
1534
冊 8

葎山集秋之才三目録

月
八月十五夜
九月十三夜

花山集巻第十

秋部

月

益とこそは為中にも出よ秋まて九月
秋月を包む笠のうちより待の歌
月のうらく雲こそぬくの十八歌
待くるさ秋なれ云やさくら歌
月の絵へり流さとニ枚屏風歌

雲かゝる月や星斗空見えけり
池月とわんえんえすゝむ出るゝる
やちよすむ中につゝ月のまとゐ
様子見のめもるハ東斗鼓に
東様ハわふさるしつ天の河
あへり月のかとゝやわらき道
月星ハ天の戸起りしぬるゝに
水に様ても和合の起りハ

かまへハ此の庭かう様の出世に
細しかの様ハ清猿の起りに
様乃龍あもしハ宮めにて雲見道
あまさの雲に出るの様乃船
鮮れて三國一やそうし様
雲見あこたしれや月の白鷺
梶原ハあつる男の様見る子
雲に様ハ時くまんかうの種の

山こそ力任せる月やさし目弥
又夜ぬけちる月のまろつさり
雲水の愚鈍針か三日の月

豊之国あく

月代をうけるこの嶺の御光引
詠人のお新町ゞ婦る月夜引
万灯の中に須一灯か爲れ月
土の泉れ葉から絶か三日の月

村雲ふつてもや月の萬舞

三 長修へりさく

月出ていきこの灘や今の浦
西へゆく月や弘誓は五て舟
月入てあとは空くの獅引
雲水のそりの橋まゝや力んの月
其の下さし法のさり月の笠
挑灯の光はまの月夜引

見の月よりうらに梅かゝやちる匂
天下比小長刀うやみの月
秋くえゐやまたも月のさ枕
月のくるゝ村雲つゝふ錦りかな
武蔵野ハ大きの月の動くかな
ねの月もみぬ月もや米乃飯
三ケ月の出るや船のへ乃字守り
曇らぬ菊良の月やよる鏡

竹林ゟ月や嵐の完まとひ
新清水やえこしの初山月
なつきさの母月をまつるか雲の帯
船頭や切ゟさし山路ゟ月の舟
むかし物くらべる三日月や源なり
渕ゟ瀬にうつる月みよ二日め
清く居るまよ出くさ◯こしや月ゟ
智恵なくて曇らぬは運の月哉

出くかゝる天窓よへむ月の弓

なかうむしみ内ゝかゝる月の　けけ

帰ふ満さいゝきり世山

みつ月やむらいぬやうかりを

月の影落る雲やかゝり

水ふ色ぞ橋姿やり月の陰形

下てみ道ハ萬よ月色ぞ　詠

白雲ハ月ニてより本文

ありかくの水にも色月の赤裸

月はあかおさし出る雲やわよの　やた

横雲やゆきちり月のふさう　成

清月の余句は文字や十七夜

世といふ姿の月の影法師

貸秋よりいゝはさきの月はなし

たけ清き雲るの月や錦破

月代そ宿るちんのちやの池

秋にみる月や金の丸ぬけし
言語ゝみるこの月也 政重
秋と冬としらるゝ人や月と雪
先をふくいなをも志は月見よ
月影の遠さいなやふらりん
遠き月をよくみらくのちか
秋かせはいわらぬすむ月
春地いちらんと影や同月

月に雲子置をれゆ
高そら晴月や入日の 龍捕
出ぬまは光そまちれ矢は月夜
出ていみて引つさ月のうさ
すゝ切くまん丸なれや水の月
真丸な月はましきの光
盆出て秋をみる月や
也の座をまつり番の月

難波の三の天井も月の白き
上と下ハうかりつかうの氷は月
鏡家へうちひしおのうミは月
掃除の月都しとむ水粧粉
蟾引もミ川ふも月の嵐なふ
菊桃の露くもさるふ完は月
池なは切り草もみの月の影
楽まりは月や世るあは月汐ふ

光り出る月こそ露は玉撥
月さへ今まる雲ハおかず雲の秋の嶽也
甚りのはかりてくる瀬の月
かのくと月やわりは人まうこ
晃は目の光りうる月の大江山
月乃為雲みちかりてさ雨夜　永
待勝はうミの月は出来や江　志ん道
菊へゆく住吉月のおありふ

みな人を又見捨る月の道
ふくかやつまる名月秋
月さりの嵐や出入のあかし山
三日月は鈎となるれやさかの河
老となる見しめる月のさ行ゑ志は
猿猴のさうつる月と水搖杓
弓となる光月や雲は破的
雲光手は弓張月のゆけ弥

雲の足は百足の月のくもま山
三日月のたちて弦ふや物互勝
見さ月はゑんりし山の出来
まつむる光輪ちらひとする月白
月の数光冬のまろさや鏡て玉
月光道つかさにくまるやうら墨
おんをさそ光かりん月の泉
月代の想をまへかよ天此川

弓に弦きらかへるれや月の弓
旅の空の月も並めて西国云
出く月人のこゝろやたゞけ　弘
月にみなあるは漂子これかなや　河
山の字をおそろしき子の月　柁
窓さ窓にかくそ出るの名月
月の京坪も掴りるさき　勧り
ねられしとあるゝ月の嵐　水

雲とつひ月や守護をる嵐の　新
竹もしや思案あるもの秋の月
闇にまた人のまちふや月見良
粉落するやむかしより秋月の　おお
月また見る古代なりせり東山
門にひるい並めけ観音見れ月の　良
一目さこゆみ兜数めにこん月見親
無地のあそひといはん月刀人　水

箱根山のおくハ此月の外ゝ
あまのとや晴く霧ふる秋の月　重吟
只見の月を
ちれ松よん川世中あすの月　同
まつ此月を
入く海ふ涼さ出せるや海秋のゑ　同
六日の月を
鳴や月ふ志ありあまもい康範　同

まつ此月を
月やけよあまのつて出く十七夜　同
雲ふあへ家月をとさせんのなみ外　友后 貞利
ちれ出る月を待さ草け此孫家　洛中 正伯
許よきの志んきつしや月は雲　生田 考利
待る此月をも雲のかくし哉　桜井 貞房
猿て刻さ波月みつ雲井ゟ家　紀州粉川 久政
此生後く霧去や月ふ雲此脚　篠山 賢与

月も良き清や雲のはこひより　森三ヶ瀬 英蕉

月も雲の衣まかる寶珠哉　寺町 信風

鶴鳥も雲とはいふ杉林の月　森 友之

出る雲の上ゆく月や雲まくら　梅田 梅友

月や光むら雲は鍋の目釘宛　桂木 無延

雲は関守ふく月や宿を廻り　箇田 香屋

月高しつゝみきるは人の淳雲哉　広瀬 葛洪

月の影の雲や延あつて絵そらこと　法花 為門

出る月姫もや雲はれし跡　八木 吉治

鶴雲は月や安候のかはらち　磐口 正次

鶴雲むかふやくなかの月の影　松濤 一治

月は見え掴さうれる雲やむかし影　吉岡 政維

月も今雲の脚りやも川之　極口 宗右

雲のたて雲の上なる月つれ哉　林安

何れよりもわけれくまき月哉　敦賀久右衛門 久友

出の影むし人も面影の月乃哉　吉村 吉行

置露く月見ともなしよるの秋　播州芥川 玄芳

けさの智恵は鏡に月成ぬくや露　敦賀行大井 自休

月は波の玉珠は智恵の鏡かな　徳风

妙鏡は真如なりしや空の月　名尾 玄梳

月乃鏡かされみこけれはおもさ松　岩谷 長益

月の影うつす本照ますや鏡とそ　所羽 良保

増鏡とみるは月の鏡かな　永谷 貞則

月にうつり世の影なくみか　森 玄忠

欲見やこゝら掛し月の鏡　洛下 正伯

月の雲払てん上人のこゝろ　孝作

雲霧をはらしては月の鏡かな　播陽 良経

お出る道をも照す鏡の月かな　利政

下句の月を鏡とて　丹州舞鶴 安彰

一つ井洛に下る影と月かな　玉川 一叶

浮かくと天の字をゆるす鏡かな

大皆の月を宿さる汐かな　清成

月代は新玉城の空のうち　大坂久米寺　伴人
秋の月ハまさ釈迦や切利天　苑川　玄孝
近くみる月ハ常花や四王天　平尾　笑山
わきて月を新やまきせんな面　大津　如貞
めつらしき月ハあきさせんの光かな　門跡　定利
月は世界くまなく月のまつさかり　大面　正奥
月ハてれてま清く天人の舞衣朝　国分寺　英治
淡色みの切出花つく空の月　尾張　宣紀

雲のまや天がつく空の月　大津　如貞
大そらにみるも地ハかされお月柱　出雲　政直
出入の月や河らんの中の空　大面　安清
のきもくや水に落るる空の月　大坂住大森　勝純
星のあきいつい瑞雲や空の月　子川　一井
二千里の所のその月の雲かな　大谷　貞利
月の雲いさや人々の八九月　国分寺　政次

進善母

蛇の果難なき人や運月の枯　京 但英

九月廿三夜月のかれて
母九歳なる人有りけれ
九品ハ月のうてなのちうにあり　求 尚栄

月ハ如来世尊ハ菩薩御光　求 古陸 伊人

法花経のかんせりとみる月を　求 一濤

月も影やさなりハ情母こんの　活 宣留

涙淵りて

月ハ佛因ハ出ら知ぬ流るか　良和

円の影を月の水なる源なれ　文蘇

月も輪の名ちる影や髑骨事　友正

月影やかり出る舟出の菜碗　正次

内ゞ舟前津ゞぬりなり水の月　貞利

山の舟やうつゝそてみる宮様　政宣

水の月ハ蛇のちや又雲上　盛次

名比月ハめうさゝかさ池のひとへ　勝純

西京へひとりきかぬ次の月　　吉田　信元

新月ハ楽天にすむ光りかな　　平判　宣恵

名の雲に清浮さめやうな月夜　　宗孝

まするにハ書きる程と物ま月夜かな　　光安　月

月と日ハ室町にまづゝなる字かな　　秋葉

月の字ハ偏つくりともみの雲　　一滴

約計のつの字にはなり三ヶ月　　最中　備及

三ヶ月は秋ハ君さく月の背かな　　波　波滅

極れよの月ハさやうならぬ鏡かな　　在　若時

乙女子の吹くよの月の十六夜　　忠本　菁宮

月見ま達ハかゝるやさて十六夜　　大坂長　宗純

晴がうろ八日の月や十六夜　　江戸　梅麻

十六く月をさくらや雲の種　　野州　猶故

色も秋に二八の月れ光る　　三河　宣陳

清月は八ゝもさねよ十七夜　　江戸　椿麻

寿月とも十八云ぞそふの月　　中海　高織

中秋の日發句ニ

月を思ひ十九出家の執情御　一滴

ならぬあそて又盟月比月見に　守棠

月さへをとつまハかくの出ぬ哉　大年　京次

ともかくさ[illegible]むつの[illegible]縁やよるの月　長頭丸

見れハ見えて深緑によるハ秋乃月　同

まゝせのなぬ出るつやさ秋の月　同

嵐戸てミせハ鏡もや秋乃月　同

三日月ハ尾斗まで萬に　住吉　未得

ありかたえへ月讃りつ三ヶの月　仁王　方好

十文銭の数ある一文それや三ヶ月　豊岡掛旬　盛信

三文ヘミえりまくるや三ヶ月　谷口　妙雲

みての月やまゝ雲わさて出るハ　石原　是れ

二ヶ月ハかまくらの後の住山　住田　政成

拍子なりや敏きり山の三ヶ月　渋谷　政信

三日の数ハうこまてハ追生毬月　安明

雲の波かゝるハ海も二ケ月　中嶋 俊寿

捨舟うねかゝりちりくや三ケ月　重和

ゐる舟入道もさハみの流さん　葛木 芳昌

中そらハゐる舟のこゝろの月　京 重若

月鏡それ家ハ三日坊主哉　山田 貞則

花の月ハ折櫂ゐる舟哉　平井 延易

天井ゐそうの月押くや三ケ月哉　文水 元晴

三ケ月ハ海の夜まやまうけ汁　播州 貞居

釣針のかのすそりさる海の月　友谷 貞利

見かりてハ菩薩のかゝむ小田の月　篠山 賢与

さる月や高井の並木林のおち　小和田 中好

伝ゆそへみる月や仁義まへの家　桜井 為延

常盤木ハ月さまよりおちこぼれ　田中 久次

月や枝ゐちまりとみむる松の下　深谷 安明

ひそんなりや松のこゑ出る岸の月　竹田 玄蕭

ゆるさ山の菩薩や月のかゝれ茸　与正寺 肇達

出る山もひくゝ月明りかな　熊本　梅延

見雪や山より出る明さ月　薩摩六　晩之

流川虎渓山の月見たり

誰か里行るに麻のまちうく帰るゝれを　乃月

志ていなけとくするさ山の月にふ　留泉　蕪子

あまて居るハそりの角丸月枕ふ　友竹　盛庸

蜂あまて月さへさせるや麻の角

年ふ猫奈麒麟の角丸月枕ふ　了未寺　文彩

子の刻剣月やうしの玉　弥津　如貞

月乃猫ふそふ黒雲や熊ね波　以岩　政重

手ね長さ猿猴や月の秋逸人　名谷　貞好

猿猴の月ふ明ろいきやつまふ　浜谷　種栄

御へゆく道これいちとてんの月　池上　可明

てんぬあうさ紀ふあるや宿の月　杏也

雲ふかくれんけさ掛ハ月のうさき　梅山　保友

月のうさぎ出よ百歳も院うまし　森　吉往

鷺なれや芝ころ月の嵐も　梓　品冷

みなれやむかふうさぎも月の須磨　堺　由高

新うけ月の気や盛か力々　笛田　清雲

うさ耳ならぬ毛ハ長月の嵐かな　大阪　正久

待つる月の新やちるかく嵐壊　吉長　信元

山の端や落める月は嵐捕　野田　玄蔵

月に思ふ嵐の出て猿飛山　名古屋　友和

風や雲ふかくる月の嵐持　摂津　如貞

黒雲やさそふる月は嵐もよ　森　宗清

雲ちる世月の嵐乃めす世　石寺　久幹

入い坊月乃嵐戸の雲は袖　森　林義

虚花の月の嵐の雲かくさ　黒　正純

星は数やちるさいさ月は嵐募　村山　笑経

和ふ月の嵐つゝきも秋もふ　池子

めまぐるしとうふるは月の嵐かな　笛田　一如心

月の嵐秋日入の坊やおもむ哉　中嶋　貞宣
八ちは月ハ嵐のわらひ哉　水谷　貞昭
搔雲や月の蛙は筆とて　同　舎一
月の夕家ハ川をすまぬ池の面　吉長　好信
月は蛙木為てされハ棲ぬ松　大津　助喜
養保といふ捨し月の桂は木　文静
月桂五百丈といふを
羅漢のや月の夕は五百丈　友　吉蔵

天は京や月の夕には花曇　井上　正知
くらうおとと雲やよひの月の舟　利政
出る方やまらん盆ちよの月の船　同
艀舟ぞや東西くまる月の舟　平尾　幸治
月の舟や去海の梅帆雲は波　東　忠親
二子曇は々けく出よ月の船　信田　政信
あそつけハ家死よ月乃船　長　西豆
水は湊よ月や方圓の夕が舟　中嶋　貞宣

播州むろみく

月の舟入やそれむろの浦　住吉 伝元

屋形船のかゝりけは月の舟　鳥田 友勝

一天に居や飛脚船月の字　淡路 常年

さすらん月の舟さをや桜川　尾張 勝栄

はみくも新造なれや月の舟　下里 俊貞

数をせく月乃舟をやよひ星　京 雲此

月ハ星ある船星やたきけ舟　肩 正春

鶴舟とやせのかきハなかりし月　大坂 宗清

弓張の月やそのまゝ舟軍　加茂 政重

月弓とみるたれともしおろかな　大和 勝重

よし流にうかむ世先揚の月か弓　八木 長利

わつゝやのむかし板や弓張と月の弓　大和 無等

根をし先と射るや流されさし月の弓　浪合 安昭

よひなや先うけるに月のゆみ　宗存

たゝさけしを射るちかせ月の弓　福地 清重

ちやくりかへせとはなかせ月比弓　　名越　政信

いなかはの若ちりぬるや月の弓　　鳥羽　萬右

引宮ふいるや月ころ比弓　　首土寺　つる

心引く二張の弓や氷の月　　多賀本橋氏　正長

東山やさしかかる弓の流れの儒　　井上　正知

かつら男さや月弓比天下持　　奥田　切包

流るるとゆきちる月の入作山　　粉川住　宗次

新月へいはる月弓や弦張弥ゑい　　長崎住　含哉

おち次白雲ハ綿の月の弓　　大河　正利

新宮祝言ふ

新宮の柱立るや月比弓　　味家　後治

ふらく母ちやくハ弟ゆや月比弦　　嶽　英時

月の弦ハ乃かもと雨のちぐらか　　蔭　含織

ゆるそうしさ天弦宰人月の弦　　素　東呂

倚座弓かく

月比極男やてうち倚座の弦　　湊色荻秋　忠昌

人まねに月さへきるや切かさ　平尾　幸以
諸国山の月にもうるや和楽道　桃山　保友
これそこそ月の名すりや日のさ道　嵯田　良友
月ハ佛祖師とやいちん新法師　池田　ノ身
儒道の様の本に月の新かうし　桜井　無学
横川もと月やさそう律新治　桜井　久徳
和歌へ引脚の月の新法師　紙石　良友
宮ふかくさ月に出るや新たに　嵯　宗利

時きそむ枕のけふの新法師　長浜　是流
新かうし秋やさき秋の月の友　了安寺　文府
満月とみせたくさるとくれ　堺　宣重
同おかげてる月一輪とみえるかな　沖　若湊
同ふけてみるやちらる此月屋夜　林庵
雲の神やかのふこりある星月夜　摂州　正泰
うる池のわまの立ちる此月星　中島　忠良
三国とおさむるやみるや月日星　浄泉寺　圭可

月なくは徳も此まゝ記つゝ示　坂倉 政辰

月さらに此哉振りや川ゝ堂　相合 林蔭

流れくるや月さし松の書示　仲 言次

月さんと目のさやちうとや理 宗承　宗之

押ひらきさかんと見むきの月三 宗示　了専寺 久鶴

押あけく篠子つゝや宗の月　伊勢宇山 奎房

みけるや胘ともまて国の月　中川 実治

湖も月さし宗や行連子　江戸 林麿

天王寺めくく

月さしは中島戯りや大字堂　安藤 良和

垣の見え此月や才一ふしの海　未 政芸

月は蛇の目清く波やわら六治　中村 一正

猪の百年隠しむら人の跡　未吉 遊芸

みそへ

月は在川新百国のさつひ

ちら遊きめ人の清明の月影引　了専寺 久鶴

瀬にうつる月や清見か関 尾 信重
三笠山や月影ちかくなんとさうし 為 吾記
月に雲天の魔王の知恵嶽 貞山
月やあらし玉文さらに色知る君 大坂 令成
月はゆくし宿のさかなはおのか命 京寺 文範
押絵のや屏風の浦の月の海 紹
丹波野瀬の枩もて月を見てく

夫冠の山のわきまへの色月 中将 貞宣
紐かけの三の上にも月のいはや山 奈 一入
羽の紫紀縁つまむやつまき山 了安寺 文範
月乃夜もものけふこそ人ならぬ 斉州 樹政
月や出さ嵐ふきさわの人の海 ここ 了安寺 文範
湖や月をおかしくれわたる笠 大津 如貞
円の孫をやまんかうふこその海 留氣
信濃路をゆく人の錢おかぬ 見月 よ

本意猶く月影ハ尽とも
中嶋 高江

雲とし月ハ海中への雲尾かな
川口 蟹緒

月見舟や浦の松原に松かな
松浦 一泊

月に清き人風や雲ハちそく海
津 如貞

富士山と並ぶや水の田子の浦
南部 純勝

箱根越て暁ぞ又乃月もと
宮氏 由也

ゆけとく此月ハむさし野もこゝ哉
松山 保友

月の影入るや桐のはこの山
嘉奈 吉行

比えなし月ハ来広のあふミかな
堀口 豊好

波にさらまさそく舟中の
月見哉
手柄 家澄

淀まさに月見の船つくかな
桜井 貞房

月ひとつちくつもの浮れやる哉
大井 自答

月もあふや高館の雲外哉 川
河内 常填

ゆきのさんれ月を須磨の丸裸

月の猶ハ大内山ふ出仕かな　梅山　保友

月ふまけ行のこしれみやこの里　了安寺　久嘉

宇治中良く

月ふめくまいんわふ?の芝原　蓮生寺　一安

月あけハ雲の林やちられ蔭　江戸　林鉄

須磨船にも大きうや月況　京翁　正伝

須磨まで

もろさん月をたまふ遍照寺　京翁　休世

二ツ撓ふ月ハ淀河ふさし梁　明田　貞則

新堀さ月のおりやお京桃　江戸　勝重

すまさふ月乃光やも新堀さ　浪花　安明

さの月を清光明来れむね　友谷　貞利

天をわふ?まるを?月夜　京　貞儀

丸影の志ろきを生れ月影　京　宗重

風のまそさ家の月の丸裸　紀重

月乃影や完れわくかを?羅　京　宗重

月はてる井ならぬかきさへ水　　猿　家貞

実のなるを見るむかしの月秋　　岩　正次

見へ抱も加ゝ流るゝひゝ出月夜　　高水軒兵貝安　梅

月乃名も秋は晴待れ出る彩　　拾穂　后

海底の魚を月に見られけり　　丸山　助清

月の秋も称つるや千金も三年　風之　　並木　可

月やゝ智恵もまた人秋に　水　　森　常正

待の夜も月みる人の御作　　三春

玉章にかりや月のうき多け　　丸

異に見る月を読むる哉

月のうきれあらて玉兎哉　野山　　月

雲は蛇香たる月の名所　　〃

夕ひつる掛かや月見る　名　　〃

ゆきかつ生のけやちつき誰ん　之　　〃

山姫の袖やんや月の大刀　　〃

名月の空の月や中よきもの鏡　　〃

とら風もおそれと出るや月の舟
汐月のさゝく新やきすら
かつきさゝら雲や海賊月の舟
范蠡の立隠人ゆく月の舟
雲ハおこる龍を射たる月の弓
まる出るハ孫そるや孫ふ月の弓
三ケ月ハ常娥や登し翠の弓
いる方此山の端より出月の弓

三ケ月の弓を見いるやそらの方
先の月此頃わけかしも三ケ月
みか月やわすれかゝる生れそ
八月三ケ子を伴ふ旅人
のりたくかくいひそれ
ハやそ子をまうけゝる
一 發句
三ケ月ハそれ名月のわか子哉

渡り初る慈悲をさへや高欄の 〃
天の河れ鵲渡り初かされ月 〃
月の勝や天乃河瀬の水車 〃
梵天のまつり螺鈿の雲の月 〃
月と日と須弥の宮別やまつり揃 〃
やちる月立るや世界の露乃数 〃
月の露みな此空ぞやどるの盃 〃
さん月の跡にも此わするもの 〃

月鉄は虫もみるかな楼の窓 〃
むら雲もつる霄や金甲 〃
蝦をあけよ月に一夜かけの鶏 〃
みなうつるは月すへるる盥 〃
秋の最や月ちる猿のそれけ 〃
雅子らん月最に鶴此もる○の外 〃
月にひろ露や紫銅の手水鉢 〃
月こそへ見ぞうらひつく露の宿 〃

皆見も此月ちんちんかつて露宿
我ふところにたちひる霧の　月
かさおり山にあり風の月
立け山のはくる月やまち鏡　中
風やいさ月次にてしるの拝
まれ人の鐙のさ〇や星月　秋
ちらひきて入ぬる月や鹿志さらり
月と惜しむやら海人のふと

出る〇く入さ海にてく月秋の
ふまもやなけかれ〇と月に参
月あめくれむいさしけるや月
角かくすさし深の空ね月
月めし添いまえ目をえまう
本よりたかて気流さも心清く
さかくまりもも二ヶ国の
なとと入くと示見るなれい

月は出雲たちふさぐ茅の国　左於
行田過ぬ人いさゝか月夜哉　引
武蔵の野ぞさの露の月夜哉
月は出て十万億土西方も
過きられちやまさけり時下
立秋ちらかへすこそ
月出てかりたちふちの小路哉
角や治兵衛宅にて

秋の月を千代まですゝめ哉　引
雲やちらり月は判官あき　くぎさ
煩悩の雲や月秋のいぬの風
蓮雲はひさ狭きれや月の色
月は雲やられ始見のさしかけ　掛
行ちらふ雲ゐる月やたちまる
何ふ雲を隠さぬけふゆく女
出敷さいとくつきまつる秋道

竹山の月や霧りり十六夜
月のなをおとしひ十六 女引
おめせハお月もてつら十六秋
憲法寺月の利生や十七夜
月ハ善人悪女やめくひ廿夜
名月
めいけつの伯父母ハえつ 寡引
十字文や月の数さへ九 錦

月の名さへ空音ふたつしらし霜 引
月くれ月ハ月なをその月
鴻卿りやハおとし卯月の名細
山の端ふかくちまれ寺ら寺前 夜
ときら月やおりくもときや 玄栄
天ふ名見ゑさおもしろき月
芋をさとうわハ三文なれ月 秋引
月おちひ田米てされ前ちわ 引

月ハおもひきられ寳の市　安芝
あらくするやこつこけり　江月秋
守康やきよのぬらく紅葉山
こゝ人も忽いそかくや　空月秋
笠かとへまいりんためつとわ　月秋
雲れそてらふあらきり　空月秋
野菜鶴するハこれから　月秋外
まきるや穀もせんさをわ　月秋

感涙も朋に花月の光かな
わまひのふらるやさゝ口にけ　空月秋
うつ草の露のおもひ涼やきふの月
立花にあよ旅ふかゝやく　空月秋
わすく時笠をぬけしら　月秋
海中にみてるや珊瑚の月の色
留守法名をして　西荘
ゆきといふ具をはますや月の図

月も人も十五夜は花のさかりかな
人の目にうつるや月の光かな
大上戸みくもあかねや宵月夜
芋此子も月見んれたされ家にかな
　蓋名月と不知望者しよ
こなたも十五夜やたれん宵月夜
菊やまたひまんも月のあつき　ちらしま
芋此子のうふ祖ありはいろ宵月夜

名月は流れもうちて此たかの空か
鏡にも芋名月のいもしか
しは秋や芋名月の芋魁
菊雲は龍のいけの宵月夜
うそ月のきけるも宵は日此光
雲まらやもんまつ一年ふみの月
　蘿品玄参先生
三五夜の中國つきあきれ月

月ハ星野晴てその影ハ尓
御名をも見せし月の影
名月ハ目利さへなき縁尓
錦しや思案するその後月
て錦月の男さらハもの後尓
名にふかくれ月やかれは
かおてみようやきん此秋の月

観水

出もむやと宵の月のみちの影
妙める色を手影さゝ月見尓
廣沢の藻中色よりや林の月
名ぞ高き子月ハ晴らるゝ尓
めそて月ハ誹明月の盛哉尓
訃明て御名と秋は此の月
湯の額れ名月ハ古さし影里
名月みてんと見ぞきん錦の色

季吟

岩田 政宣

久成

安田秦 徳辰

忠政

てらしかゝよ晴明月の雲かくれ　古谷 貞好
名月にかゝりてかくる雲や何　宗房
名月そ粧ふをせは芋ねらひ
　なふりしぬ　昌 勝長
毎は宵まちの月やふりあらひ　梅山 保友
出るいつのそやとゝの月ぬめりの哉　京 則家
孫ありて栗なり芋名月の添ふ　渋谷あるの 維房
林みの芋名月乃新法師　佐田 政信

嫉妬や老を十五の桂乃月　鵜村 愛清
上とさふ下十五夜此月見に　高富 会室
十五夜そ月を惜とのらん　大森 勝継
月かさと雲に二九四十宵　法堂 一歌
夕顔も出の月光るは千塚五　福井 清之
二三ヶ月と見つゝまたみてハ八分　坂倉 政辰
七秋やしと思ひつ月の出ぬ　名越代 氏広
三十の夜空思そろふ比月　梅山 保方

大かたや三五夜の月ハ鶴の觜　洛下 正伯

月ミちて雲の帯とくきんかな　新 一笑

一朝二三五夜まされは月の介　利政

定めなやさん暮れ月の東白　橋本 久好

名やきるぞ三五夜秋中れ松の月　海延

姨山寺も入り三五夜の月見かな　三亭

住吉へ月見に参りて

住の江を家の月ハ満珠かな　為玄

かた人ともさてや月の同宿量　丹羽 玄成

楼の本になるや出るも名月夜　同 良保

出る月のくもすきさやまされ楼の本　宇 重信

のら月いらすひさしの軒なかな　加賀 林庵

三国を一目なかめの月ぞ秋　如雙

三五夜あらくや大佛も中月夜　某井 宗沢

三国や宮あのめでたれる月の秋　洩き 自省

のら月かのうち雲や星の糧　淡谷 出明

くるしさの中に面白き月夜　筑紫　一忽
しらぬ人とも花やさそふ暮月夜　丁寺　文鶴?
花鳥風月も月夜
ひろさふ月のさやかなる嵐?　淡路?　秀存
雲の紐ほどくとハきりも月夜　新斫　方淑
生[illegible]切りて人まで月夜?　安芸?　識緑
かゝら月ハ人の佃比ゑちんか　山森　華水
さくさくさら揺りて盛や照夜　寛之

御庭出て夜ハ法住の月夜　利政
流く稲ん[illegible]みえたる望月夜　幸元?　幸山
名月の鏡井のうへやさし月夜　江戸　梅麻
めぐりては夏の月やまゝの望秋ハ　妻ノ栄?　一部
うまれかはる身を板こへんかゝる月　春閣
鉢の下へ入らぬよろしき月夜　秦　貞昌
風のあるかたへ下りる月夜　笹山　量林
雲門と出でゝすゝや望月夜　山濱

雲の上やえりいちんこの秋の月

尾州長嶋　雲秀

西湖にも比住の江や今宵の月

京　盛庸

山ふかひとつ浮名にもなく

同　角

嵩山康の山深にすむ人の月

濃州　正伯

中秋の月は今川のちぎりかな

荒木　宗感

ぬの星をともやとこ宵の月見かな

日待にも

夜前の月をもちあひは日待かな

大坂　対も

菊のうけかにも

月は山かえて宵の字りや菊の露

摂　心如

月かゝる雲やこの宵は波すさき

一扇

とこ宵がなくらえめぐる月の光

大坂　勝貞

縁をおもひ上りん月の盛かな

江戸　常久

月前ともさしもす宵と宵の名

若州小浜　慈元

名月ともてけうえんをやさすらう

長琉

名月をみかにあそふ宝敷かな

同

須磨とりふるやおとし月姫　同
かゝ人の名月やらすや慶の芋　同
雲霧やうち名月のさわかしき　〻
古筆う作かなし
初り出す月見茶やかいもちい汁　〻
月の前初るやさらゝ蜀芋　〻
去二年をそへて松年此月見ふ　〻
月かゝやせ三五夜中の色ん（きやこ）　〻

九おとし十五菜の秋かなし
十五夜をまんまる丸の月みるかなえ　〻
めら月の光は雲にかくれんや　〻
湯し空の影や月にあはれ名月夜　〻
八月十五夜夜丸さゝつき　〻
こらうぬ
生る跡もくもりはせしの月見雲　〻
今年中の月やわかぬのと霜外　一

一　九月十三夜

二千里雲なき月の影も哉

名ふるゝハ二夜ひとつそ秋の月

今宵こそ月のくもりやまた雲

見とまさるかくもる月ころ今宵哉

名の梅の雲なき月やちよの秋

大臣かつゝ月と数してみる哉

大臣なれ良のさかりも尽し哉

山端や大臣名月のかりの

また月みるや今宵の精眼

去月ハ十三月のむかしかな

三日月や十と幾らる光かな

時満手織純浣して

日蓮の涕光の月を十三夜

ゆくとしのまなる月の雲比臣

まきのけく二十三夜比月かな

ねまちハあすも月もれる草ふ
明しさも名月ハ山ふかうこそ　李吟

まちさかハあす此月ふりかゝる谷ふ　同

詩雪やむかし三秋の月ふる　利政

九月十三夜の月雲を
出る秋か

十二夜よぬきんてらや月の秋
ぬりに十三夜深ふる　枝子

おほさはいま十三夜時
文君の所ふ　在白

まわの十三夜を定此月　定房

菊月をかくて世ふの十三夜　道賦

名ありおつきあるてふ月の秋　良知

名月ふ引かわまくやまる男　元缺

喝食をとて待りて
ありきたき名月をまさる所　人身

まちし月出るや雲も晴のそら　猶井 清之

あらしふく玉ゐる月や露の月　東武荒木 常成

氷ゐ刻ハ雲ゐ月の二子かな　同所 一致

雲月ゐんとまちれちらしかな　勇

月二夜のちれやせつきんの峰　利政

小雲の家ゐ残りて

月ゐ雲の小雲やうつる浅き夜　勇

ひとゐあるさ雲ゐ月のさそれ外　長瀬

餞別　六

ちらくするや雲の月の出る元　円

あらひ月にわすて太豆やひの緒　ゝ

太黒のまあ月の面乃ゐ　ゝ

大津つる面ゐ月とある数外　ゝ